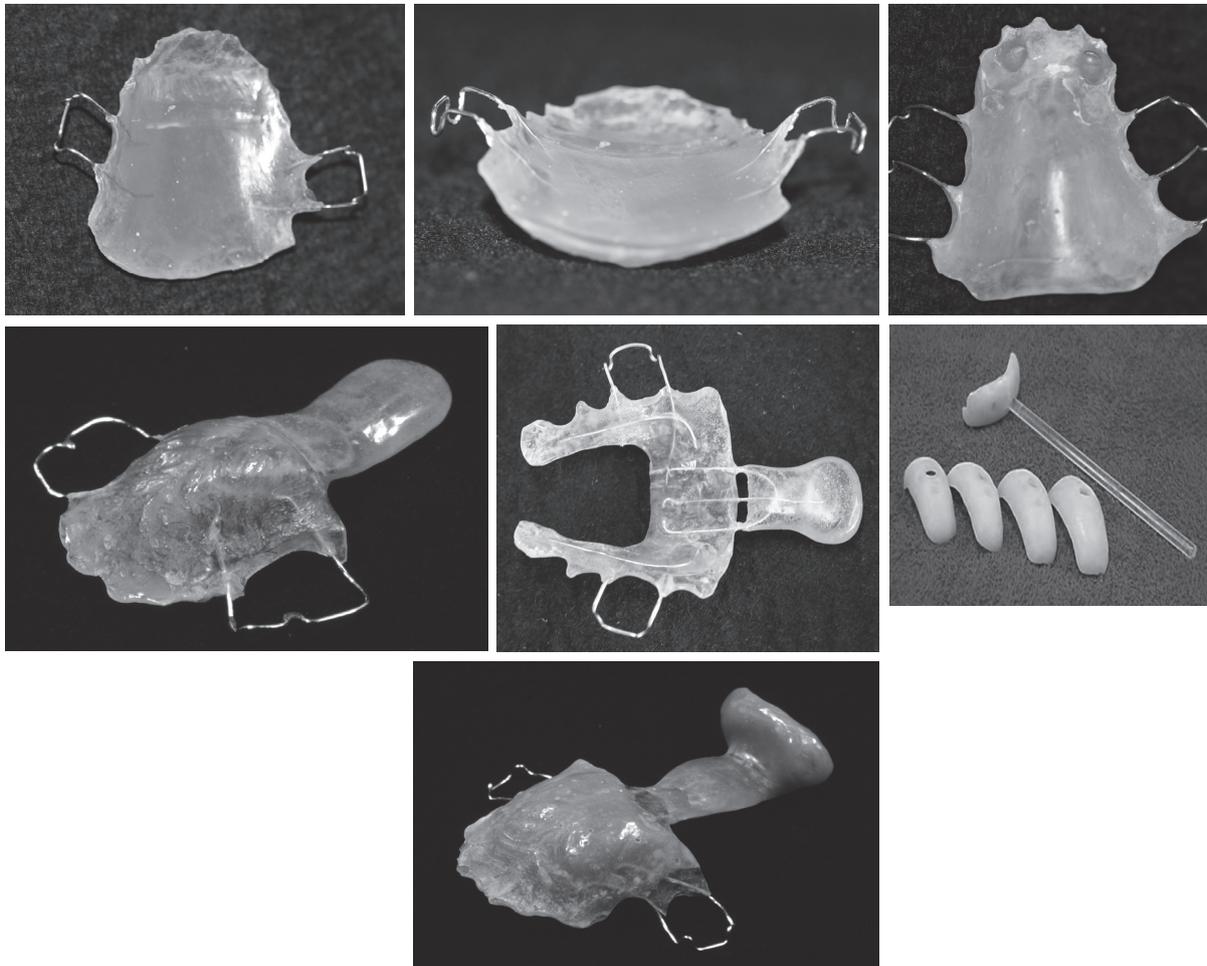


解剖・生理・機能で考える

摂食嚥下障害・ 構音障害のための 口腔内装置

舘村 卓 著

PAP, CM床, PLP, スピーチバルブ,
口唇プレートの適応・作製のポイント



本書掲載装置のキーポイント

PAP
(恒久的装置)



CM 床
ワイヤビーズ型



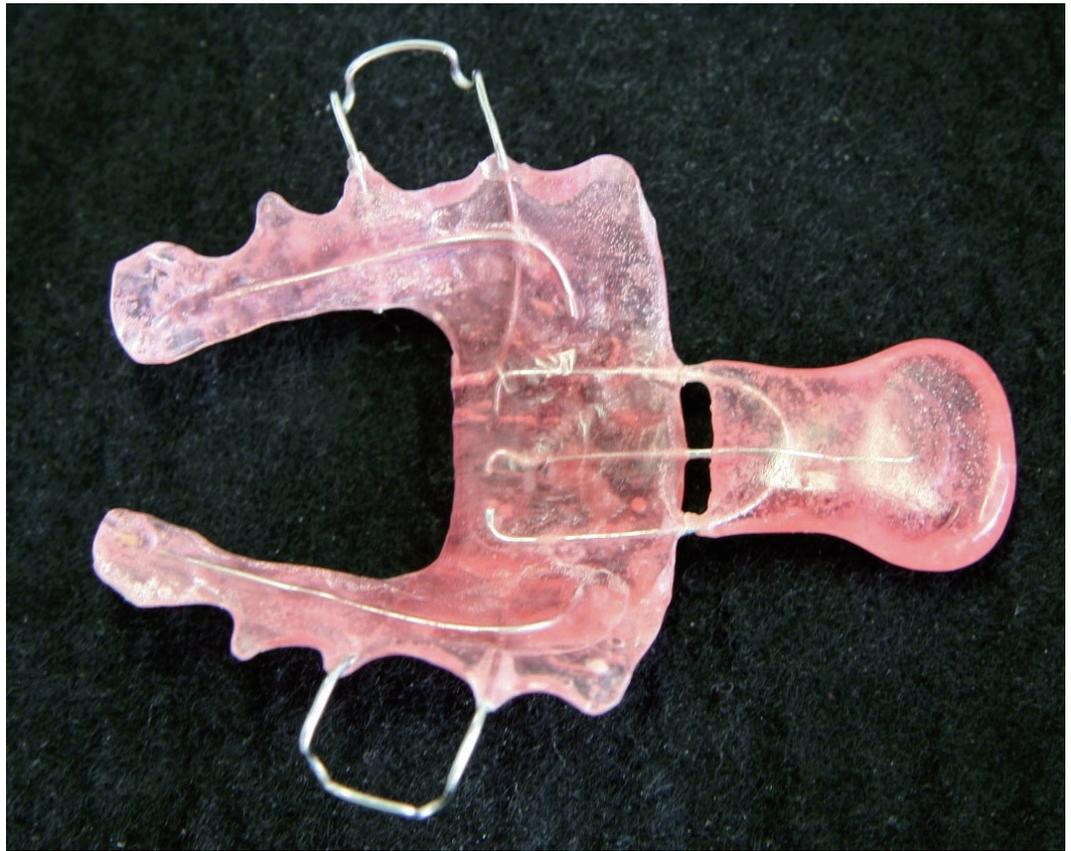
CM床 コーン型



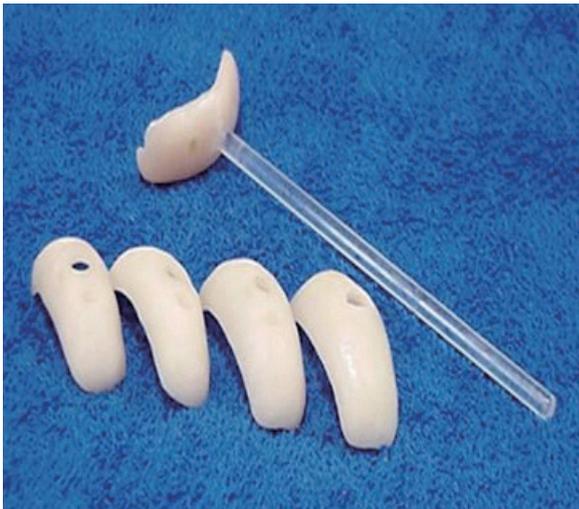
PLP



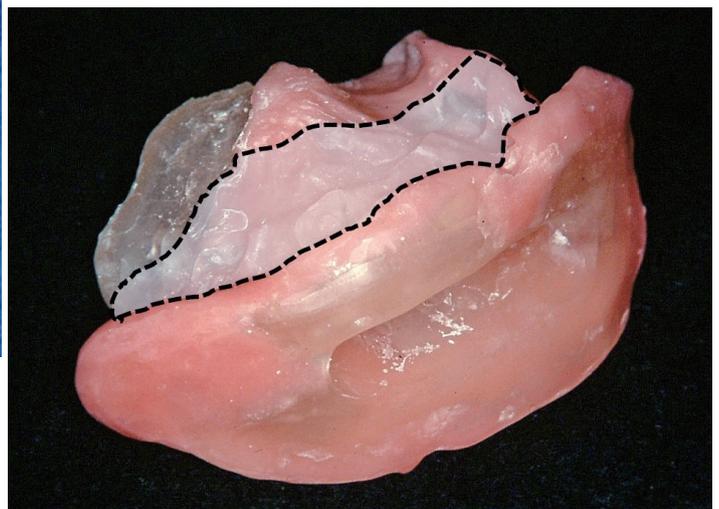
Stress-VPI に用いる PLP



口唇プレート



左：バー付きプレート，右：マウスピース型装置



I

舌接触補助装置

(PAP : palatal augmentation plate)

(PRP : palatal reshaping plate)

1 はじめに

PAPは、元々は口蓋の器質欠損や舌切除後に舌と口蓋の接触が困難な場合に口蓋の形状を調整して接触を可能にする床装置である。そのため、当初はPRP (palatal reshaping plate) と称されていた(図1-1)¹⁾。最近では器質欠損による舌と口蓋の接触障害だけでなく、器質欠損に伴わない舌機能の障害に対して、舌機能の賦活を図ることを目的として用いることもあるため、augmentation (機能の増強) の意味でPAP (palatal augmentation plate) が用いられるようになっている。

咀嚼運動は、舌の前後上下左右運動で行われるため、食物摂取時にPAPを必要とする場合の多くは、次のいずれかである。

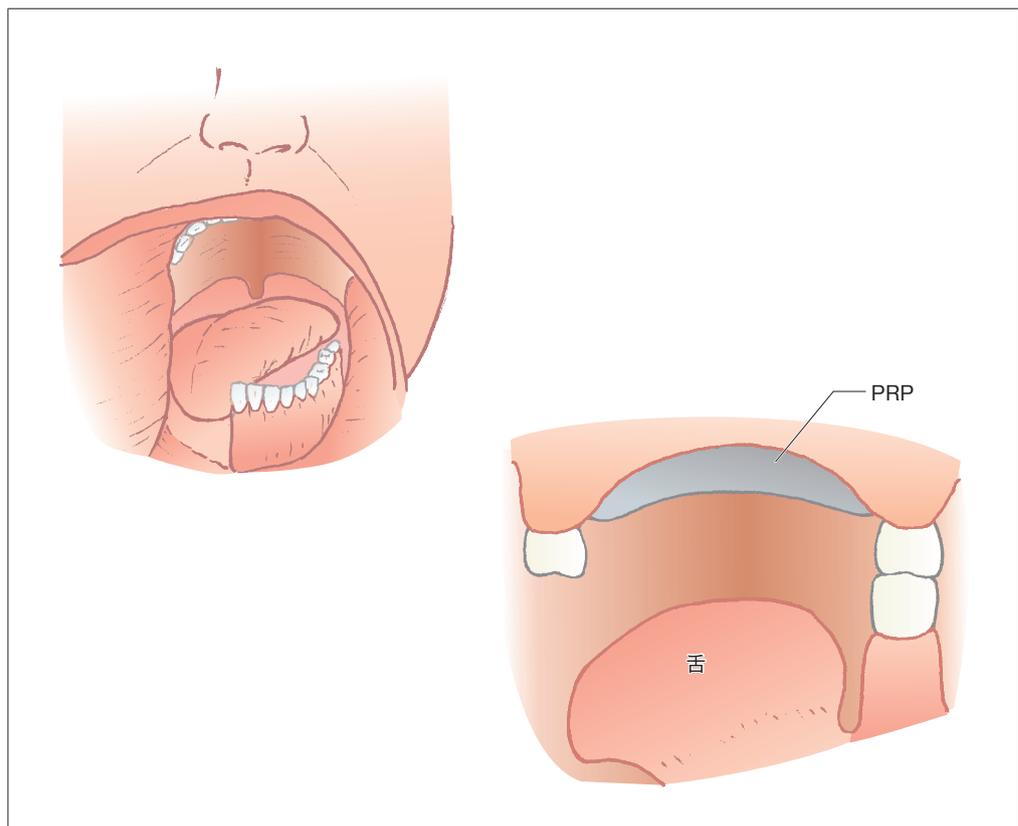


図1-1 PRP (palatal reshaping plate) (Logemann, et al., 1989.¹⁾) 右側舌腫瘍切除等によって残存する健側の舌が右側偏位し、口蓋との接触が困難になった場合に口蓋の形態を再構成するための床装置。

IV 口唇プレート (Lip bumper)

1 はじめに

三叉神経麻痺によって口唇閉鎖の感覚閾値が高まっている場合や顔面神経麻痺によって口唇閉鎖運動が障害されている場合には口唇閉鎖が困難になり、口唇破裂音の表出が困難になったり摂食時に口裂から食物が口腔外にこぼれることがある。一方、これらの神経筋機能の障害だけでなく、口唇閉鎖のための筋機能の低下によっても口唇閉鎖不全は生じる。口唇プレートは、これらの場合に、口唇機能を賦活するため、前歯部口腔前庭に留置するプレートである。

2 関連する生理学

図 4-1 は上下顎総義歯装着者の義歯装着時と撤去時の顔貌である。この図が示すことは、上下口唇は「口裂を閉鎖しようとする」ということである。したがって、上下前歯は口唇閉鎖運動の抵抗となるため、前歯を有する場合には口裂を閉鎖するだけで口唇閉鎖に関わる筋群の筋機能は維持される。しかしながら、長期



図 4-1 上下総義歯装着・非装着時の側貌
左：装着時，右：非装着時。非装着時の所見から、上下口唇は口裂を閉鎖しようとするとき口腔内に向かって運動することがわかる。